

ラテンアメリカ都市物語

＝第18回＝

モンテビデオ 「スモール」から「スマート」へ

市川 禎理

地球儀で日本の反対側と言えばブラジルと語られることが多いが、実はウルグアイも日本から最も遠い国の一つだ。ブラジルとアルゼンチンという南米の大国に挟まれ、面積は日本の半分ほど。農牧業を主要産業としているため牛は1,100万頭以上だが、人口はわずか345万人の小さな国だ。一方で、民主主義指数¹や腐敗認識指数²は中南米一であり、ラテンアメリカ諸国の中で政治的・社会的に安定した国である。首都モンテビデオはウルグアイ南部、ラプラタ川河口部に位置し、国土全体の0.1%程度の面積しかないが、総人口の4割にあたる140万人が住んでいる。雰囲気はラテンアメリカにある国の首都というには非常に落ち着いており、ヨーロッパの地方都市と表現したほうが想像しやすいかもしれない。私も赴任直後、穏やか過ぎる雰囲気に少々驚いた。



写真1：セロの丘から眺めるモンテビデオ市街（在ウルグアイ大使館提供）

モンテビデオのはじまり

「モンテビデオ」という名前の由来については諸説あり、「マゼラン艦隊の船乗りが遠くにセロの丘を

見て“Monte vide eu”（私は山を見た）と述べた」というものが最も有名だ。少なくとも“Monte”が「山」を意味し、セロの丘を指していることは数ある諸説で共通している。

モンテビデオは1724年～1730年、当時ポルトガル人と領土を争っていたスペイン人が、ラプラタ川に面しセロの丘が見える大きな湾の沿岸に要塞を建設したことに始まる。

ウルグアイが独立を果たしてからは、モンテビデオは首都となった。独立直後の1828年にはモンテビデオの人口はわずか1万人程度で、その後1852年には3.4万人、1860年には5.8万人となり、多くの移民を迎えることで1881年には16.4万人、1902年には27.6万人と増加していった（当時ウルグアイの全人口は99万人）³。モンテビデオ建設初期はスペインのカナリア諸島からの移民が多く、その後イタリア、フランス、イギリスなど様々な国から入植してきた。特にスペインやイタリアからの移民が多く、現在ウルグアイ人の約半分はスペイン系の子孫にあたり、そのうち70%がガリシア地方出身だそう。モンテビデオのガリシアセンターは1879年に発足し、世界にあるガリシアセンターの中では最も歴史が古い。現在、スーパーはどこでもガリシアのビールが売られていたり、日常の中で「Galicia」という言葉やその文化の一端に触れたりすることが多く、気質もどこか似ているように感じる。私は学生時代にスペインのガリシア地方に留学していたが、まさか遠く離れた南米ウルグアイでガリシア文化を感じるようになるとは思わなかった。

7月18日通り

独立広場から東に向けて伸びる7月18日通りは、昔からモンテビデオのメインストリートで、街の中心として発展してきた。元々は「中央通り (Calle principal)」という名前だったが、1830年7月18日の憲法記念日に因んで1946年に「7月18日通り (Av. 18 de Julio)」と命名された。ちなみに憲法が公布されたとされるマトリス広場（憲法広場）は、独立広場から旧市街に2ブロックほど入ったところにある。



写真2：独立広場のアルティガス將軍像 見つめる先が7月18日通り（以下、写真は全て執筆者撮影）

独立広場の中心にある建国の英雄アルティガス將軍の像は、旧市街と独立広場の境に残る門をくぐり、新市街へ向かうように見える。7月18日通りはアルティガス像の先に伸びており、官公庁や共和国大学のキャンパスの他、多くの商店やレストランが建ち並んでいる。共和国大学の創立もまた、7月18日である（1849年）。

全長3.5kmある7月18日通りの終点には1830年の憲法制定会議を記念して1930年代に建設されたオペリスクがある。それが交差する通りはアルティガス通り（Bulevar General Artigas）である。つまり、



写真3：独立広場から伸びる7月18日通り

7月18日通りはアルティガスに始まりアルティガスで終わっている。

7月18日に纏わるエピソードはこれだけではない。アルティガス通りとの交差点にあるオペリスクからさらに真っすぐ1kmほど足を進めると、センテナリオ・スタジアムに辿り着く。同スタジアムは1930年FIFAワールドカップ第1回大会開催に向けて建設され、ウルグアイ憲法記念日の100周年を記念して「センテナリオ（100周年）」と命名された。1930年7月18日、完成後最初の試合でウルグアイはペルーに勝利し、決勝ではアルゼンチンを下して優勝を果たした。この出来事はウルグアイの独立に重ねられるような形で「7月18日」にさらに華を添えることになった。憲法記念日の7月18日に因んだ建設物や出来事は探せば探すほど見つかり、知れば知るほどこの通りに対するモンテビデオの人々の思い入れの強さが感じられる。独立広場から伸びる7月18日通り周辺は、こうしてモンテビデオのみならずウルグアイの中心として築かれていった。現在では大統領就任式のパレードや大規模なデモが行われる通りでもあり、ウルグアイにおける民主主義の象徴とも言える通りとなっている。東にあるポシートス地区やカラスコ地区の発展にともない、今は以前よりも落ち着いた雰囲気となったようだが、それでも毎日多くの人で賑わっている。

昔から変わらないことと言えば、7月18日通りを歩いているとよく見かけるガラピニャーダも見逃せない。ガラピニャーダはピーナッツやアーモンドに砂糖を絡めたお菓子で、売り子の中には40年以上前から毎日売り続けているプロのおじいちゃんもおり、この通りの隠れた名物だ。散策する際、甘いにおいがしたら是非試してみることをお勧めする。

モンテビデオの交通

モンテビデオに電車や地下鉄はない。列車はあるものの主に貨物用であり、現在は運行が休止されている区間も少なくないため、ごく一部の人を除いて市民の日常の移動手段と言うには程遠い。

モンテビデオでは20世紀初頭に路面電車が利用された。その後、1951年にはモンテビデオ初のトロリーバスの運行が開始され、1957年には路面電車の運行が終了した。路面電車に入れ替わる形で運行が開始されたトロリーバスは約40年にわたり利用さ

れたが、徐々にバスが導入されていき、1992年1月26日が運行最終日⁴となった。以降、モンテビデオの主な公共交通手段は路線バスである。



写真4：昔の路面電車の跡

トロリーバスの運行終了後、電気式の交通機関は20年以上なかったことになるが、数年前から電気バスが導入され始めた。政府は環境に優しく持続可能な発展のため、電気バスや電気タクシーの購入を助成し推進している。

モンテビデオ赴任当初、バスは停留所や経路を知っていなければ利用しづらい印象があり心配していたが、モンテビデオが提供している携帯アプリの質が良く、経路や時刻表、バスの所在地や停留所等がリアルタイムで確認できるため、それは杞憂に終わった。チャージ式のカードを作れば現金で利用するよりも安く便利に利用できるのだが、面白いのが乗車時は自動改札式ではなく、運転手もしくは車内の料金担当の従業員に時間を申告して機械にかざす必要があることだ。この点はアプリの利便性の高さと比較すると少々改善の余地がありそうで、あまりスマー



写真5：最近少しずつ増えてきた電気バス

トではない。

いずれにせよ、アプリのおかげもあり、妻は日本のバスよりも利用しやすいとまで言っている。ただ、現地の人々はあまり満足していないようだ。ラッシュ時の渋滞や公共交通機関はモンテビデオ住民が改善を望む主な課題の1つとなっている。渋滞改善や公共交通機関の充実を図るため、7月18日通りや一部の区間へのメトロバスや路面電車の導入、リバーシブルレーンの導入、停留所への電光掲示板の設置、交通カードの利便性拡大、バスの混雑状況をリアルタイムで確認できるアプリ機能の追加など、9月27日に実施されるモンテビデオ県知事選挙の各候補者は実に様々な提案を行っている。

スマートシティを目指して

実はウルグアイはラテンアメリカで通信インフラが最も整っている国の1つで、例えばブロードバンド固定回線の普及率は85%だが、そのうち75%が光回線である。セイバル計画でノートパソコンを小学生へ無償配布するなどITリテラシーの強化にも力を入れてきた。また、エネルギー政策を転換し大規模なインフラ投資を行った結果、10年余りで国内電力の98%を再生可能エネルギーで供給し、2019年には総発電量の23%をアルゼンチン及びブラジルに輸出するほどになっている。

モンテビデオは数年前からスマートシティ化に向けて取り組んでおり、2019年にはバルセロナで開催された“Smart City Award 2019”の都市部門でファイナリスト6都市の1つに選出された⁵。持続可能な都市を構築し生活の質を向上させるため、市民の声に耳を傾け、市政への積極的な参加を促すような工夫を行っている。モンテビデオには1990年から住民が社会事業などを提案、決定し実施するための市民参加型予算が設けられているが、2019年には市民がプロジェクトの提案や投票によってモンテビデオの運営に関与できるデジタルプラットフォームMontevideo Decideが設置された。同プラットフォームの枠組みで、最近ではタバコの吸い殻のリサイクル箱が公園に設置され、市内の公衆トイレの位置や利用可能時間を検索できるアプリが誕生した。また、バス乗車をスムーズにするために、今年3月からは初乗りが自動的に1時間に設定され、乗客は移動時間が1時間以内の場合は都度申告する必要がなく

なった。小さな改善ではあるが、市民が提案、議論したことがきちんと採用されている。このような姿勢と小さな積み重ねによる成果もあってか、近年の市政に対する住民の評価は年々良くなっている。住民が常に改善を求め続けている問題は少なくないが、一方で多くの人が「ある程度は改善されてきた」と評価している。

モンテビデオで生まれ育った知り合い何人かに、近年でモンテビデオは何か変わったかと聞いてみたところ、揃って「特に何も変わっていない」という答えが返ってきた。また、モンテビデオについて皆が口を揃えて「小さい」「(何をするにも) 遅い」と言う。実際の住みやすさという面ではまだまだスマートとは言い難いようだ。「外から見ると進んでいると見えるかもしれないが、そんなことはない。電気代は南米でトップクラスに高いし、税金も物価も高い。様々な取り組みで少しずつ住みやすくなっているとは思いますが、ペースは非常にゆっくりだ。モンテビデオは小さく、良くも悪くも村のようだ。」とのことだ。

モンテビデオに対する市民の認識が「スモール」から「スマート」に変わるよう、生活の質がさらに

向上し、皆がより住みやすい発展を遂げることを期待している。

(本稿は2020年9月9日時点での情報を基に作成したものである。なお、すべて筆者自身の観点に基づく私見であり、在ウルグアイ大使館の意見を代表するものではない。)

注:

- 1 Economist Intelligence, 2019
- 2 Transparency International, 2019
- 3 Mariño, Roberto. (2000) . Crónica de los Inmigrantes en Uruguay. Montevideo, TRADINCO S.A. pp. 53ff
- 4 Trolebuses de Montevideo <http://theageofthetrain.tripod.com/trolebusesdemontevideo.html> (2020年9月5日閲覧)
- 5 モンテビデオ県庁ウェブサイト <https://montevideo.gub.uy/noticias/tecnologia/montevideo-finalista-mundial> (2020年9月8日閲覧)

(いちかわ よしみち 在ウルグアイ日本大使館専門調査員)

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジル 天使が舞い降りる村のカノア保育園— 21 歳女性保育士、ブラジルの貧しい漁村にひとり飛び込み保育園を作る!』

鈴木 真由美 サンパティック・カフェ発行・星雲社発売
2020年8月 160頁 1,700円+税 ISBN978-4-434-27913-3

1997年に20歳の保育士がサンパウロのファベラの一つにある保育園で3週間の実習を経験した。2年後日本の保育園で経験を積み、ポルトガル語を勉強してサンパウロに戻ったが、もっとあなたを必要とするところで取り組めと薦められ北東部セアラ州の州都フォルタレーザから170km南東の観光地カノアに隣接する漁村エステーヴァン村に赴く。仕事に追われる村の母親たちの要望で、保育園を開くことを決意し、行政との折衝や家庭訪問を行い、現金経済化や観光開発が進展する中で、躰、生活習慣の改善などに尽力する。村人たちとの交流が広がり深まるにつれて、望まれて生まれてきた子どもたちがほとんどいない、小学校に就学出来ない、続けられない子どもが多数いるという事実と直面する。さらに支援団体からの援助が打ち切られたのを契機に、2005年に「光の子どもたち協会」を立ち上げ、村人やスタッフの力も得てカノア保育園を続けている。また、2003年には村の青年と結婚し2児に恵まれた。

単に若い日本女性が夢を追ってブラジルに入り保育活動に打ち込んだという自伝に終わらず、村の人々の生活の背景にあるもの、子育てを通じての交流、バイリンガルに育った娘や家族とのことなど、全ページを子どもたちの愛らしい表情や美しい海浜の村のカラー写真とともに豊富な話題を楽しく読ませる。

(桜井 敏浩)